



episode 29 娘と心がつながったと感じた瞬間

投稿者 W さま(大阪府)

今年で20歳になる娘は、今でも絵本が大好きだ。毎晩寝る前には「よんで」とせがんでくる。娘は、小さな小さな赤ちゃんだった。在胎週数25週、出生体重わずか720グラム、原因不明の早産だった。産まれ出た瞬間から、生きるための過酷な闘いが始まったのだ。何とか命は助かったものの、医師からは「重い障がいが残るでしょう」、そう宣告されていた。週1回の通院とリハビリを条件によりやく退院許可が下りたのは、産まれてから7ヶ月が過ぎた頃だった。

障がいのある身体も心配だったが、何よりもコミュニケーションの取れない我が子をどのように育てていけばいいのか、私は途方に暮れた。表情は乏しく、笑うことも感情を出すこともしない、まるで人形を育てているようだった。私の言葉や周りの状況をいったいどのように理解しているのだろうか？ 毎日が不安と焦りと、たとえようのない悲しみでいっぱいだった。

ある日、何となくの日課になっていた絵本を読み聞かせていた時のことだ。『こぐまちゃんとふうせん』(こぐまちゃんとしろくまちゃんがふうせんで遊んでいる。一生懸命ふくらませようとしているが、なかなかふくらまない。)「ふくらまないねえ」。私が話しかけても、娘はぼんやりと定まらない視線を宙に向けている。(こぐまちゃんがふうせんにおおいかぶさる)ーぼくのっちゃった われないよー



『こぐまちゃんと
ふうせん』
著者 わかやまけん
森比佐志
わだよしおみ
編集者 佐藤秀和
こぐま社 1972年

次のページをめくろうとして、ふと娘を見ると、怯えたように目を見開き、口をへろの字にしている。次のページは、こぐまちゃんの重みで、ふうせんがパアーンと派手に破裂するシーンだ。私の中で衝撃が走った。「この子、わかってる！」初めて娘と心がつながったと感じた瞬間だった。次の日から私は、図書館で大量に絵本を借りてくるようになった。

あれから19年ー楽しい本読みは続いている。言葉を持たない娘が、合わせたこぶしを上下に振る。これは「絵本をよんで」(お願い)のサイン。娘と私の秘密の合言葉だ。時々、私が本を開いたまま寝てしまい、怒った娘につねって起こされるのも、また愛おしい日常である。

「絵本の日アワードin FUKUOKA 2019」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



こぐまちゃん と しろくまちゃん

「こぐまちゃんえほん」と聞いて、多くの方がイメージするのは、ホットケーキタワーの前に座る“しろくまちゃん”が描かれた、オレンジ色の絵本ではないでしょうか。

全15冊からなる「こぐまちゃんえほん」シリーズのなかで、群を抜いて発行部数をあげているのが、『しろくまちゃんの ほっとけーき』です。シリーズ名に冠されているとおり、主人公はグレーのこぐまちゃんですが、本シリーズでダントツの人気を博しているのは、こぐまちゃんの幼なじみである、しろくまちゃんを主役にしたお料理絵本なのです。いわば、サイドストーリーが大人気となったことは、作者も出版社も予想外でした。

1970年に、『こぐまちゃん おはよう』にはじまる3冊が出版されると、以降3冊ずつ同時発行され、全4集と別冊の15冊が生まれました。このうち、第3集で発行されたのが、『しろくまちゃんの ほっとけーき』と『こぐまちゃん ありがとう』、そして、『こぐまちゃんとふうせん』です。



こぐま社の元祖絵本おじさん！

シリーズ15冊の表紙にある著者表記は、すべて「わかやまけん」になっていますので、一般の読者は若山憲氏が単独作者と捉えているのではないのでしょうか。実は「こぐまちゃんえほん」は、絵を描いた若山氏を含め4人の男性によって共同制作された絵本なのです。

シリーズの発案者は、こぐま社創業者で編集者の佐藤英和氏です。社名自体が佐藤氏のあだ名である“くまさん”から命名されていて、そのこぐま社から絵本を出すには、こぐまのキャラクターが一番ふさわしいと考えたのです。

そこで絵をお願いしたのが、若山憲氏でした。その他に文章をお願いしたのは、歌人であり、ことばについての専門家である森 比左志氏です。『はらぺこあおむし』(E・カール作)の訳者といえば誰しも頷けるで

しょう。お話の中でいかにドラマ性をもたせるかというところで、児童劇作家の和田義臣氏に力を発揮してもらうのです。

しかし、表紙に3人も作者名を並べるのはデザイン上もすっきりしないので、3人に了解をとって若山氏1名とし、奥付の著者表記を3人連名としたのです。さらに、佐藤氏が引退をした後は、編集者として佐藤英和氏の名前も加わりました。



絵本おじさんの遊びから生まれた

共同制作の方法としては、森 比左志氏が原案提案者となって、若山氏が絵を描いていき、それを見ながら4人で議論を重ねるという具合でした。全作にわたり、4人全員が合格点を出さないと完成しないのです。文字をまだ読めない小さな子どもたちが、こぐまちゃんが「何をしているのかわかる絵にしたい」と「絵で読む絵本」を常に心がけていたのです。

そのため、各巻のテーマは実際にやってみるのが信条でした。4人で動物園に行ったり、保育園に一日入園したり、それから、ホットケーキを焼いたり、風船で遊んだり、おじさんたちは必ず実践したうえでお話を創ったのです。おじさん4人して風船でさんざん遊びながらアイデアを出したときの思い出を、佐藤氏は「風船遊びで一番たのしいのはお尻で割ることなんだよ」と語っています。

絵本おじさんたちは子どもたちに向き合い、小さな妥協も許さず、ただただ子どもたちに誠実であらうとしたのでした。その姿は、第4集で完結とした決意にも表れています。「慣れで作ったものは子どもたちに見破られる」と判断したのです。

2022年に佐藤氏が他界され、天国で顔をそろえた4人は、さらなる絵本談義を交わしているでしょう。

文献

- 1) 中日新聞社, 他 編: こぐまちゃんとしろくまちゃん〜絵本作家・わかやまけんの世界, 中日新聞社, 愛知, p.32, 2021.
- 2) 佐藤英和: 絵本に魅せられて, こぐま社, 東京, p.140-162, 2016.